

サクラ

世の中に たえて桜の なかりせば

春の心は のどけからまし

在原業平

この歌は『古今和歌集』にも『伊勢物語』にも登場する^{ありはらのなりひら}在原業平の代表作である。いつ頃桜が咲くであろうか？どこの桜を見に行こうか？雨風は大丈夫だろうか？などと、うきうきした気分で居ても立ってもいられない。開花期は一瞬にして過ぎ去るので、せわしない気持ちにもなる。五十を過ぎたころから筆者も春になると桜を求めて渉猟するようになったので、業平の心情がよく分かる。桜さえなければのんびりと春を過ごせるのにと、桜に最大の賛辞を贈っている。

サクラの語源は^{コノハナサクヤヒメ}木花開耶姫の「サクヤ」が訛ったものであろうという説があるが、それは間違いである。古伝『^{ほつまつたゑ}秀真伝』によれば、天照大神が都を富士山麓の原の宮から、伊勢の南の伊雑^{いざわ}に遷したとき、重鎮の^{サクラウシ}桜大人が桜を捧げた。大神はその桜を伊雑の宮の東殿に植え、南殿には橘を植えたのである。京都御所紫宸殿を始め、古い神社にある左近の桜、右近の橘はその名残である。桜大人のひ孫こそ富士山麓にいた木花開耶姫である。彼女は富士山本宮浅間大社の主祭神でもある。ちなみに桜は『秀真伝』では男女の道が適っているか否かを占う樹木であった。強い妬みがあると美しく花聞かないのである。

それでは桜は古来薬として使用されたのであろうか？現在、漢方のエキス剤では、華岡青洲の十味敗毒湯にのみ桜皮として配剤されている。桜皮は中医学では先ず目にはしない。『本草綱目』にも桜皮は登場しない。しかし日本の『大同類聚方』には記載がある。「^{えやみ}依也美」(疫病)に使われる薬に、オウネ(烏頭?)、ツチタラ(独活)、オホシ(大黄)、アケビカツラ(通草)とともにサクラカハ(桜皮)を配合したのものがある。又、「^{すはふまやみ}須波不支也美」(咳嗽)にハマオホネ(防風)、ハマアカナ(柴胡)とともにサクラカハ(桜皮)が使用された薬もある。他に、サクラノハナとモノノカハの二味からなる方剤も「依也美」に利用されている。大塚敬節著『漢方と民間薬百科』によると、桜の外皮を取り去った内皮(甘はだ)は、はれもの、ジンマシン、水虫、皮膚炎、腸炎、せき、酒の悪酔い、肩凝り、しゃっくり、魚やキノコの中毒に用いられている。青洲も解毒薬としての桜皮の実力をよく知っていたのであろう。十味敗毒湯はいかにも和製漢方である。

角館の樺細工の中でも、霜降皮の茶筒は山桜の樹皮の風合いがよく出ていて、何とも言えない趣がある。この桜皮も、防湿、防腐の役割を担っているようである。

さて、在原業平は父方の祖父は平城天皇、母方の祖父は桓武天皇という出自である。女性にもたいそうもてた貴公子だった。そんな妬みもあってか、江戸時代には冒頭の和歌の「桜」を「女」に替えた川柳が流行ったという。平安時代の『三代実録』は、業平のことを「体貌閑麗、放縦にして拘わらず、略才学無く、善く倭歌を作る」と評している。容姿端麗、和歌に秀でるが、漢詩文をこなせる才はなく、自由奔放であるというのである。「春の心」などという表現も、当時としては革新的な言い回しであろう。業平も「願わくば 花の下にて 春死なむ その如月の 望月のころ」を歌った西行のように、諸国を遊歴している。そして「敷島の 大和心を 人とはば 朝日にほふ 山桜花」と詠じた宣長のように、^{むらごころ}漢心よりも大和心を重視した確信犯でもあった。

(山人)

